

モニターの表情読むに苦心せりりモート会議に八人集えは 植山俊宏

リモートの会議や授業の歌が多くなってきている。そのうちの一首。会議では参加者たちの表情や動き等々を無意識のうちに読みながら、司会進行をしたり、前の人の意見を受けての発言をしたりするわけだが、なるほど画面にうつる顔や上半身の動きでそれを察知するのはむづかしい。集合、集団を歌にするのはむづかしいが、そこをうまく歌っていて感心した。

緊張する隣の空き地 紅白の幕が張られて人集まり 植田美紀子

「空き地」を主語にして、一風変わった一首に仕上げたアイディアが見どころ。雑草がはえたり、野良猫が横切ったり、ずっとリラックスしきっていた空き地だったのだろう。それが一変した。新しく家を建てるので、地鎮祭がおこなわれるのだ。緊張する空き地……。

入試日のろう学校の面接は震へる指の手話と向き合ふ 山本糸人

緊張で指がふるえているのだろう。面接する方もされる方も、双方とも手話で会話している場面らしい。この作者、毎月、ろう学校の教育現場をていねいに作品化していて注目している。

オーボエは息掠るるも夕焼けの歌うたいつつ稜線をゆく 佐藤 亮

吹奏楽の楽器いくつかをうたった一連中の作。ここはオーボエの音色を「夕焼け」「稜線」の二語でとらえて

短歌の現在

No.481

今月の14首を読む

佐佐木幸綱

いる。比喩のスケールが大きいのが、いい。楽しいアイディアと感覚だと思ふ。

バカボンのほっぺに蚊取線香の渦巻く昭和の子ども 斎田真希

だ我は

「昭和」をみちびき出す序詞に「バカボンのほっぺに蚊取線香の渦巻く」をもってきた感覚に注目。たしかにいま、天才バカボンの漫画本を見ると(わが家にまだちゃんとあるのだ)、昔っばいな、昭和だな、という感じがする。

Zoom 歌会にだれかの猫がみゅうと鳴き四角い枠のかすかゆらげり 水口奈津子

何人かの映像が画面にいつしよに出ていて、猫がだれの画面の猫なのか分かる前の数秒がうたわれている。「枠のかすかゆらげり」は、猫の家の人が振り向こうとしたのだろうか。

今はもう白鳥を狩る城人をらず寂しき人々手にパンを持つ 菊池鏡子

江戸期にはあった人間と白鳥の間の緊張感。不思議な視点を導入した一首として選んだ。こういう視野の広さは作品を大柄にする。江戸時代の大名たちの鷹狩では、鴨などのほか、鶴や白鳥も狩の対象になっていたと読んだことがある。かつては人と白鳥の間に緊張感があったのに、今はもう和気藹々、まったく緊張感はない。

ガラス越しの面会時間に傷ついて母が見ている三月の空 児島直美

母上は病院か施設に入っておられ、新型コロナナウイル